

# 静かなぜいたくの時代



ザ・ロウはブランド創立時よりクワイエット・ラグジュアリーを追求してきた



マックスマラーのコレクションは知的な女性を「キヤメロクラシー」と呼んでたたえた



見るからに上質なロロ・ピアーナの素材はクワイエット・ラグジュアリー象徴



ブルネロクチネリは人間の資本主義を提唱することでも知られる(写真は各ブランド提供の23年秋冬シーズンのコレクション)。ブルネロクチネリのみ24年春夏

徐々に大きなトレンドが登場している。「クワイエット・ラグジュアリー」である。ブランドロゴや派手なデザイン性を排し、抑制された配色の基本的なアイテムでまとめているが、上質な高級品であることが見てとれる。そんな「静かな」富裕スタイルをさす。

SNSの「映え」は対極にあるシンプルで上質なファッションは、2018年からスタートした米放送局HBOのドラマ「メディア王」華麗なる「一族」(原題:Succession)において、すでに話題になっていた。世界的メディア企業を経営するロイ家の後継者争いを描くドラマだ。カシミアセーターにパンツといった長女のシンプルなワードローブや、ネクタイなしで優越を示す男性陣の余裕あるスタイルが、「オールドマネー」の富と権力を示唆していた。

トレンドの起爆剤になったのが、今年3月、スキー中の事故をめぐる訴訟を起こされたアメリカの女優、グウィネス・パルトロウさんの法廷での装いだった。肘までたくし上げて着るソフトなグレーのスーツ、白いカシミアセーターに大ぶりのメガネなど、一目で高級品とわかる基本的なアイテムをこなれた風情で着こなして出廷し、証言とともに装いが大々的に報道された。

これを機に、クワイエット・ラグジュアリーは「うるさく」語られ始め、23年秋冬シーズンの主流をなすファッショントレンドとなった。ミニマリズムほどそぎ落としてはおらず、ノームコア(究極の普通)を意味するシンプルなスタイル)より洗練されている。ロロ・ピアーナ、ヘルノ、ブルネロクチネリ、ザ・ロウといった品質も価格も高級な「知る人ぞ知る」ブランドが脚光を浴びている。

目立たぬことを身上とするトレンドならば、目新しいわけではない。「ステルス・ウェルス(隠れた富)」あるいは「ディスクリート(慎みのある)・ラグジュアリー」といった表現で20世紀からずっと存在してきた。ポテタ・ヴェネタはロゴマークを出さず革の編み方で静謐なラグジュアリーを表現する。「気づかれないことこそ最高」振り返られたら失敗」というファッション格言ならば、さらに前の時代から頻出する。

そもそも、この種の装いの主な担い手は経済的に余裕があり、ゆえに人目に立つことを避ける層だった。誇示的な態度から距離を取り、「内輪の掟」がある特別な世界に煙幕をはるかのようになり、大衆の嫉妬の攻撃から自らを守ってきた。

とはいえ、というかそれゆえに、着る



「見して高級とわかる抑制の利いた服を着こなす」  
法廷でのグウィネス・パルトロウさん(ゲッティ共同)

人の振る舞い方とセットになるとステータスはかえって明白に伝わり、むしろ無言のパワーとして機能してしまふ。「原告が訴えを起こしたのは賠償金目当て」というグウィネスさんの弁護士士の主張は、彼女が着こなす上質で堅実な服と立ち居振る舞いによって説得力を持った。

そんな特権的防御服の威力が法廷で明らかになり、少数派の生活様式を超えて、クワイエット・ラグジュアリーは今シーズンの支配的な美学となった。ブランドロゴや驚きのコラボで価値を喧伝するのではなく、計算されつくしたシルエツト、高級素材、そして地味で繊細なカラーパレットでささやくようにアピールする。マックスマラーはコレクションを「キヤメロクラシー」と名付けた。地味色キャメルを着る特別な階級というニュアンスが感じられる。

一つのファッショントレンドとしてとらえると、振り子のようなものなので、近年グロテスクなクローゼットをひけらかしてきたインフルエンサーカルチャーに対する反発という面を持つ。目も心も疲れさせるインフルエンサー情報よりも、静かに力を発揮するインサイダー情報が新鮮に映っているのだろう。とはいえ、SNSでは「#noalike(ステルスリクス)」「#noink(クワイエット・ラグジュアリー)」というハッシュタグをつけた新たなインフルエンサーたちが勃興。この

ルックを安価に手に入れる方法を紹介しているという相変わらずな世界が展開する。

安価であれ高価であれ、クワイエット・ラグジュアリー的な装いは、時代の空気にもなじむ。持続可能性に重きが置かれる風潮の中で、長く着られる服を選びたい、そんな選択ができる人と見られたらという願望が若い人の間で高まっていること無関係ではないだろう。継ぎはぎを当ててまで服を長く着ている英国のチャールズ国王の存在感も大きい。英国王はむしろクワイエット・ラグジュアリーの前衛的な体現者かもしれない。

また、戦争や暴動や自然災害で苦しむ人も多い世界で、ブランドロゴに頼る虚栄が見え隠れするファッションの誇示は、鈍感さの露呈にしか見えない。経済的困難や自然災害で苦しむ同胞が多い時、良識ある人は、浮かれはしゃぐ姿を外に見せることはしない。トーンダウンは配慮である。

さて、勝った「被告」グウィネスさんが、法廷を去り際に原告にかけた言葉は「お幸せにね(I wish you well)」であった。こうした優しさと謙みのギリギリのブレンドをきわめた言葉が、静かにかけられるような振る舞いが、ある階級においては「一過性のトレンドではなく通常運転である」クワイエット・ラグジュアリー」の効果を完璧にする。

服飾史家 中野香織